大河ドラマ脚本➃

「龍の時代」洲本会議編

　　　　　　　　　　　　　　　　三日木　人

大河ドラマ脚本➃「龍の時代」洲本会議編■登場人物（すべて数え年）

三好長慶（三十九歳）　　　戦国天下人、幕府御相伴衆、従四位下・修理大夫

三好義賢（三十四歳）　　　長慶の長弟、阿波三好家守護代（実質的に阿波国主）

安宅冬康（三十三歳）　　　長慶の次弟、淡路水軍の頭領、淡路炬ノ口（洲本）城主

十河一存（二十九歳）　　　長慶の末弟、讃岐十河城主、和泉岸和田城主・松浦萬満の父

千宗易（三十九歳）　　　　三好長慶の義弟（後の利休居士）、堺の会合衆（商人）、茶人

松永久秀（五十三歳）　　　長慶の腹心、三好宗家筆頭家老、弾正少弼

三好長逸（不明）　　　　　三好一門の長老的存在、従四位下・日向守

三好康長（不明）　　　　　長慶の叔父（笑岩、咲岩と号す）

畠山高政（三十四歳）　　　河内・紀伊国守護

安見直政（不明）　　　　　畠山高政家臣、河内守護代

有村道慶（不明）　　　　　阿波上浦城主、妻は三好元長の次女「翠」

小笠原成助（不明）　　　　阿波一宮城主、妻は三好元長の三女「沃」

大西覚養（不明）　　　　　阿波白地城主、妻は三好元長の四女「小牧野」

海部友光（不明）　　　　　阿波海部城主、妻は三好元長の五女「千歳」

妙（不明）　　　　　　　　三好元長の長女、堺の茶人・千宗易（後の利休）の妻

その他、三好元長の娘であり、三好長慶の姉妹である翠、沃、小牧野、千歳。

安見直政の物見の兵

大河ドラマ脚本➃「龍の時代」洲本会議編（本編40分）

■場面テーマ【兄弟姉妹一門衆結束し、三好長慶を天下人に押し上げる】

■梗概（あらすじ）

　天文二十三年（一五五四）十月、三好長慶は淡路・洲本で三好義賢、安宅冬康、十河一存の兄弟三人と会い、播磨攻めの軍議を凝らした。大軍で播磨を降したその後、三好長慶と同盟していた和泉・岸和田城主の松浦肥前守が病没した。岸和田城は三好家に敵対する根来衆の進攻を防ぐ前線基地であり、要衝であった。

　三好長慶は岸和田城の城代である岸和田周防守、末弟の十河一存と協議し、一存の次男萬満を松浦家養嗣子として、岸和田城に入れた。これによりこの当時、三好長慶の勢力圏は、山城、丹波、和泉、淡路、阿波、讃岐の七カ国に、播磨、伊予の一部を合わせた広大な地域に及んだ。もはや押しも押されもせぬ畿内第一等の実力者であった。

　しかしながら、真の天下人と称されるには、五畿内すべての地域を管掌する必要がある。当時、天下とは山城、摂津、和泉、そして三好家がいまだ手中にしていない河内、大和の国であった。

　永禄二年（一五五九）、長慶は、河内守護代の安見直政に高屋城を追い出され、紀伊に追放された河内守護の畠山高政に援軍を出して直政を退け、高政を河内守護に復帰させるとともに、高屋城に高屋城に入城させた。

　ところが、翌永禄三年、畠山高政は突然、長慶を裏切り、大和に逃げていた安見直政を守護代に復帰させたのである。目に余る背信行為であり、安見直政が三好家に矛を向けることは明らかであった。

　河内平定を決意した三好長慶は、永禄三年四月八日、淡路・洲本に赴き、三好実休、安宅冬康らと軍議を凝らした。さらに、それから、阿波へ赴き、上浦城主の有村道慶、一宮城主の小笠原成助、白地城の大西覚養（出雲守）、海部城主の海部友光（宗寿）らをはじめとする諸将と会談した。いずれの武将も長慶の姉妹（三好元長の娘）を妻に迎えている一門衆であった。このとき、長慶が姉妹らと会い、久闊を叙したことは当然であろう。

　かくして、五月一日、万全の手配を終えた三好長慶は、芥川山城に帰城し、六月二十九日、河内守口に出陣し、十月末に畠山高政の高屋城、十一月に安見直政の飯盛山城を落とし、飯盛山城を新たな居城とした。さらに、安見直政が再び逃げ込んだ大和をも制圧した。

　これにより、三好長慶は天下（五畿内）を掌握し、飯盛山城は天下人のための天下城となったのである。

　三好長慶が「戦国初の天下人」となったのは、長慶の「智略」をはじめとして、義賢（実休）の「用兵」、冬康の「水軍」、一存の「勇猛」、さらに堺の会合衆といった「異能集団」の連帯あればこそであった。兄弟姉妹の力の結束、さらには異能人同士の絆、一族一門衆の総力が三好長慶を天下人に押し上げたのである。

大河ドラマ脚本➃「龍の時代」洲本会議編（本編40分）

■場面テーマ【兄弟姉妹一門衆結束し、三好長慶を天下人に押し上げる】

○淡路・洲本炬ノ口城全景

　　　◎テロップ

　　　天文二十三年（一五五四）秋

　　　淡路・炬ノ口城

　　　広間上座に長兄の三好孫次郎長慶、その両脇の下座に阿波の三好彦次郎義賢、淡路

　　　水軍の安宅神太郎冬康、讃岐の十河又四郎一存らが居並び、軍議を凝らす。

　　　◎各人の名前のテロップ

ナレーション「天文二十三年、播磨守護赤松晴政は、別所、明石、浦上氏ら国人領主から

　の離反に苦しんでいた。これを援けるため、三好長慶は一族の重鎮三好日向守長逸に播

　磨平定を命じたが、播磨の国人領主の抵抗は続いていた」

　　　軍議の席上、三好長慶が話を切り出す。

長慶「播磨一国、我になかなか服さぬ。いかがしたものか」

義賢「おそらく、別所、明石、浦上どもは、われら三好家の力を侮っておるのであろう。

　力攻めにして、一気に叩き潰したいところではあるが、相手はたかが田舎侍。まともに

　相手にしてもつまらぬ。ここは思案のしどころよ」

冬康「では、威すという子供だましのような手はどうじゃ」

　　　神太郎冬康の隣で、讃岐の十河一存が訝しげな声を上げる。

一存「して、神太郎兄者、どうやって威すというのじゃ」

冬康「ふふっ。しれたこと。明石の港に大軍で繰り出すのよ。播磨国人衆らは、大戦をし

　たことがなく、万余の大軍なんぞ見たことがない。雑魚が鯨を見たら、戦う気力も萎え

　るであろうよ」

　　　長慶が思わず破顔する。

長慶「それはよい。戦わずして勝つという戦法か。で、いかほどの軍勢で繰り出す？」

義賢「二万もあれば、播磨の田舎侍は腰を抜かすであろう」

長慶「二万か。ふふっ。それはよい。淡路水軍の出番じゃな。冬康の世話になるとするか」

冬康「お任せあれ」

　　　長慶、大きくうなずく。

○播磨・明石の港

　　　テロップ

　　　◎弘治元年（一五五五）一月

　　　三好軍・播磨上陸

　　　瀬戸を渡る淡路水軍の大船団。

　　　海風に夥しい船印、流れ旗、吹貫、幟が翻る。

　　　淡路水軍の大船団は、やがて明石の港に碇を下ろし、阿波・讃岐・淡路の兵二万余

　　　を吐き出す。

ナレーション「三好長慶は孫子の、戦わずして勝つという兵法を上策とし、二万余の大軍

　を播磨・明石に上陸させた。播磨の別所、明石、浦上らの国人衆は、見たこともない雲

　霞のごとき大軍に驚き、戦わずして長慶の軍門に降った」

　　　三好長慶、大船団の旗艦に甲冑姿で立つ。

　　　すぐ傍らには、三好義賢、安宅冬康、十河一存の兄弟三人の姿が見られる。

義賢「彦次郎兄者、案の定、二万の兵を播磨に上陸させただけで、播磨の田舎侍どもはあ

　わてふためき、頭を下げてきおった。これからは、この手に限るのう」

長慶「うむ。これも神太郎率いる淡路水軍のおかげよ。おかげで敵味方とも血を見ずに済

　んだわ」

　　　安宅神太郎冬康が隣で、「なんの」と手を左右にふる。

　　　そこへ、東の沖から一艘の早船が現れる。

　　　長慶、腰から軍扇を手に取り、東の海を指し示す。

長慶「あれは、いずこの船じゃ」

　　　弟の三好義賢ら、小手をかざして東の沖を見る。

義賢「あの船印は、堺・千家の独楽紋。おそらく宗易どのの船でござろう」

長慶「うむ。そう言えば、独楽の家紋。急ぎの用向きであろうか」

　　　宗匠頭巾を被り、黒染めの十徳を羽織った千宗易こと、後の利休が、三好家旗艦か

　　　ら降ろされた縄梯子を伝って、旗艦に乗り移って、あわただしく長慶の元に駆け寄

　　　る。

　　　◎テロップ

　　　千宗易（後の利休居士）

宗易「御義兄上様、大変にございまする」

ナレーション「宗易は堺の会合衆の一人であり、長慶の妹・妙を娶っていた」

長慶「宗易どの、いかがされた？」

宗易「昨日、岸和田城の松浦肥前守様が亡くなられたとのこと。それを好機として、南か

　ら敵の根来衆が攻め上がってくるという、もっぱらの噂にございます」

長慶「左様か。お報せ、まことにかたじけない」

宗易「なんの、なんの。この宗易とて、三好一門の端くれ。お役に立つのは、当然のこと

　にございます」

　　　長慶が眉をひそめて、こぼす。

長慶「根来は大敵。難しい戦いになるやもしれぬ」

宗易「なれど、いずれ戦わざるを得ぬものと心得まする。武器・弾薬などの補給は、この

　宗易と堺の会合衆が一丸となって相つとめますゆえ、至急、合戦の備えを」

　　　長慶、腕組みし、しばし黙考す。

ナレーション「この頃、三好家は和泉の国をめぐって、根来衆と敵対していた。紀州の根

　来寺は多くの僧兵とともに熟練された鉄砲隊を抱え、七十万石の大大名に匹敵する勢力

　を誇っていた。この脅威に備えるためには、早急に岸和田城の護りを固める必要があっ

　た」

　　　長慶、十河又四郎一存を手招きする。

　　　又四郎一存、長慶の目の前に近寄る。

　長慶「又四郎、岸和田の城に行ってくれぬか。聞いてのとおり、松浦肥前守が亡くなら

　れた。急ぎ城代の岸和田周防守どのとともに、城の護りを固めるのじゃ。南から根来が

　攻め寄せて来る。武器の兵站については、宗易どのと打ち合わせよ」

一存「畏まって候」

　　　千宗易、一存に向き直り、声をかける。

宗易「では、わが船で岸和田までお送りいたしまする。もしよろしければ早速、岸和田の

　城へ向かいましょうぞ」

一存「うむ。かたじけない」

ナレーション「三好長慶の末弟であり、十河又四郎一存は、元関白の九条稙通の養女を妻

　とする関係上、和泉の国の九条家荘園・日根荘の代官を務めていた。そのため、岸和田

　城の護りを命じられたのである。岸和田城は和泉の国の防衛に欠かせない拠点であった。

　さらに三好長慶は、城代の岸和田周防守と協議の上、十河一存の次男・萬満を松浦家の

　養嗣子とし、岸和田城主とした。かくして、和泉の国は実質的に三好家の支配下となっ

　た」

○摂津・芥川山城

　　　◎テロップ

　　　永禄元年（一五五八）十一月

　　　摂津・芥川山城

　　　城内の上座に三好長慶、左右に三好長逸、松永久秀ら重臣が居並ぶ。

ナレーション「この年、永禄元年、長慶が危惧したとおり、三好家と敵対する根来衆がついに動きはじめた。根来は河内守護代の安見直政と結託して、河内守護の畠山高政を高屋城から追い出したのだ。河内の国を手中にした根来の次の狙い。それは。言うまでもなく和泉の国、そして岸和田城であった」

　　　◎各人の名前テロップ

久秀「お屋形様。此度、河内の高屋城を乗っ取った根来は、謀叛者の安見直政と結託して、

　ここに至り、いよいよ不穏な動きを見せておりまする」

長慶「ふむ。河内は和泉の隣国。となれば、いずれ和泉の岸和田城を狙って、攻め寄せて

　来るであろう」

久秀「ちと面倒なことになりますな」

長慶「そなた、いざとなれば援軍を率いて、岸和田城に入ってくれるか。いま、岸和田に

　は弟の又四郎が詰めておるが、あやつの兵だけでは心許ない」

久秀「畏まりました。たかが根来のくそ坊主。痛い目にあわせてやりましょうぞ」

　　　ここで、三好一門の長老格、三好長逸が咳払いし、会話に割って入る。

長逸「弾正、根来を侮るでないぞ。あやつらの鉄砲隊は手練れ揃い。手強いぞ」

久秀「お任せあれ。わがほうも鉄砲隊を揃え、万全の態勢で出陣いたしまする」

○岸和田城外・戦場

　　　◎テロップ

　　　永禄二年（一五五九）五月

　　　岸和田の戦い

　　　根来の大軍が岸和田に迫る。

　　　かかり太鼓や陣貝が鳴り、敵の喊声が響く。

　　　眼前から迫り来る根来の大軍を迎え撃つ十河一存と松永久秀の三好軍。

　　　合戦はいきなり銃撃戦となり、その轟音が響くや、戦場に硝煙が濃霧のように漂う。

　　　久秀、太刀を振りかざす。

久秀「放てえええーッ」

　　　鉄砲の一斉射撃の音。

　　　けたたましい馬の嘶き。。

　　　槍、長刀を振りかざし、根来の僧兵が吶喊してくる。

　　　三好軍の陣に雪崩込む僧兵の姿。

　　　そのとき、久秀の肩に流れ弾が命中し、膝から地に崩れ落ちる。

　　　これを見た一存、あわてた声を出す。

一存「弾正、ひけっ、岸和田城までひくのじゃ。殿軍はわしが引き受ける」

久秀「おおっ、かたじけないっ。しからば、ご免」

　　　久秀、馬の鞍にしがみつくようにして去る。

　　　騎馬の一存、兵を鼓舞し、吶喊する。

一存「者ども、我につづけ。死ねや、死ねッ！」

　　　一存の兵、雄叫びをあげて、敵陣に突っ込む。

　　　直後、鉄砲の轟音、煙硝の霧が戦場を蔽う。

　　　硝煙が風に流されたとき、戦場に死屍累々の光景。

ナレーション「鬼十河といわれた一存の死に物狂いの奮戦により、久秀はかろうじて無事

　に戦場から退却し、その後、一存も岸和田城に撤退した。根来の鉄砲隊に惨敗を喫した

　のである」

○摂津・芥川山城

　　　◎テロップ

　　　摂津・芥川山城

　　　城内の上座に三好長慶、その左右に三好長逸らの重臣か居並ぶ。

　　　その中で、久秀が平伏して、岸和田の合戦状況を報告する。

ナレーション「根来の鉄砲隊にしてやられた松永久秀は、巻き返しを図るべく、永禄二年

　の冬に至り、芥川山城に赴いて、三好軍の総帥三好長慶に出馬を仰いだ」

久秀「此度の敗戦、申し訳ございませぬ。責めはこの弾正が負う所存でございますが、根

　来の鉄砲隊は、思いのほか強敵にございました」

長逸「弾正、泣き言を申すか。この前の勢いはどうした」

久秀「この弾正、根来を侮り申した。それが此度の敗因であり、かえすがえすも無念。深

　く恥じ入ってござる」。

　　　久秀、頭を掻き、繰り言を述べ、三好長慶に哀願する。

久秀「お屋形さま、まことに申し訳なき次第なれど、根来は手に余る強敵にございました。

　あまりにも無念。この怨み、晴らさでは武士の面目が立ちませぬ。つきましては、恐縮

　ながら、ここはお屋形さまに、ぜがひともご出馬いただき、三好軍総がかりで敵の巣窟、

　高屋城を攻め落とすことが肝要かと存じまする」

　　　長慶、腹心の泣き落としにも似た訴えに、唇を歪めて苦笑する。

長慶「相わかった。では、いま手が空いておる摂津、丹波、播磨の兵で、高屋城を攻めよ

　うぞ」

久秀「して、いかほどの軍勢による陣立てと相なりましょう」

長慶「二万もあれば十分と考える。いかがか」

久秀「おおっ、それほどの大軍で攻めれば、高屋城などは鎧袖一触。謀叛者の安見直政や、

　根来のやつらも泡を喰って高屋城から逃げ出すでありましょう」

ナレーション「三好長慶が二万の兵で高屋城を攻めるや、案の定、直政と根来衆は城を捨

　てて、直政の居城である飯盛山城へと落ち延びた。間髪を入れず、三好長慶は飯盛山城

　を攻め立てた。堪らず直政はまたもや城から逃亡し、大和の国に潜伏した。すかさず松

　永久秀は、安見直政追討を大義名分として、大和の国に兵を入れた」

○河内・高屋城

　　　◎テロップ

　　　河内・高屋城

　　　三好長慶と畠山高政、高屋城へ馬の轡を並べて入城する。

　　　◎テロップ

　　　畠山高政

高政「三好どの、この城がわが手に戻り、感無量。これも一重に三好どののおかげにござ

　る」

長慶「なんの。河内の国は、そもそも畠山家のもの。高政どのが守護すべき国と存ずる」

高政「かたじけない。以後、この高政、三好どのに何事も相談し、河内の国を治めてまい

　る所存。これ、この通り、よしなに頼み入る」

　　　高政、馬上で頭を下げ、長慶に笑いかける。

ナレーション「三好長慶は、畠山高政を河内守護として復帰させ、高屋城に入れた。河内

　鎮撫の翌永禄三年正月、長慶は朝廷から従四位下・修理大夫に叙されて桐紋を拝領。正

　月二十七日、正親町天皇の即位式警固をつとめた。その直後、京の三好邸にいた長慶に、

　松永久秀から思わぬ報せがあった」

○京都・上立売の三好邸

　　　◎テロップ

　　　永禄三年（一五六〇）一月

　　　京・三好邸

　　　松永久秀、足音も高く、急ぎ足で廊下を渡る。

　　　奥書院で書物を披見する長慶の前に、久秀が平伏し、注進する。

久秀「お屋形様、大変でござる。河内の畠山高政どの、ご謀叛の兆しあり」

　　　長慶、書物から目を離し、驚きの声を発する。

長慶「なんと！」

久秀「前年、われらは高政どののために、謀叛者の安見直政を追放の上、高屋城を取り戻

　しました。なのに、高政どのは再び直政を大和から呼び戻し、守護代に任じた由」

長慶「ふむ。なんたることか」

久秀「いかがなされますか。外道の直政が守護代では、われらに再び敵対し、河内で叛乱

　が起きるは必定。いっそ、この機会に河内を攻め取り、三好家のものにしましょうぞ」

長慶「弾正」

久秀「はッ」

長慶「高政どのの所行、たしかに信義にもとることではあるが、兵を動かすには大義名分

　が必要。仮にも相手は河内守護であり、往時は管領職をも務めたことのある名家。攻め

　るとなれば、将軍義輝公のご裁可も仰がねばならぬであろう。軽々なことはできぬ」

　　　松永久秀、憮然たる表情を浮かべ、小声で答える。

久秀「「はァ……畏まりました」

ナレーション「三月に入り、堺の海船館に阿波の弟、義賢の名代として三好康長が現れた。

　康長は畠山高政の背信行為を非難し、大胆なことを長慶に提案した」

　　　◎テロップ

　　　三好康長

康長「このままにしておくと、河内守護代に返り咲いた直政は、いずれ再び根来と共謀し、

　和泉の国を狙うであろう。すなわち、河内の高屋城が、我らの和泉を攻める前線基地に

　なるということよ」

長慶「ふむ……」

康長「畠山どのも情けない。一度、自分を裏切った男を再び守護代にするなどあり得ぬこ

　とよ。そう思わぬか。しかも、畠山どのの所行は、同盟の三好家に対する裏切り行為で

　ある」

　　　長慶、腕組みして沈思黙考。

康長「考えるまでもないことよ。この際、畠山どのの背信行為を奇貨とし、河内に軍を入

　れようぞ。高屋、飯盛山の両城を落とし、河内を三好家のものとすればよい」

長慶「しかし、義輝公が河内攻めをお認めになるであろうか」

　　　康長、失笑して言う。

康長「では、義輝公が認めざるを得ない大義名分を掲げればよいではないか」

長慶「ほう。その大義名分とは？」

　　　康長、長慶に何事か耳打ちする。

　　　長慶、深くうなずく。

ナレーション「この頃、兵乱打ちつづく河内では、幕府への年貢が滞っていた。幕府が年

　貢を安定的に徴収するには、河内の平穏が欠かせない。そこで、長康は河内平定のため

　に、将軍義輝に河内攻めの承認を求めることを長慶に提言したのである。叔父康長の進

　言を容れた長慶は、河内平定を決意し、三人の弟をはじめ、一族一門衆の協力を得るた

　め、淡路の洲本に赴いた」

○淡路洲本・炬ノ口城

　　　◎テロップ

　　　永禄三年（一五六〇）四月

　　　淡路・炬ノ口城

　　　三好長慶の呼びかけに応じて、安宅冬康の居城である淡路洲本の炬ノ口城に、阿波

　　　の三好義賢（実休）はじめ、長慶の姉妹が嫁いでいる、堺の千宗易（後の利休居士）、

　　　阿波上浦城主・有持道慶、阿波一宮城主・小笠原（一宮）成助（長門守）、阿波西部

　　　の白地城主・大西角養（出雲守）、阿波南部の海部城主・海部友光（左近将監）ら一

　　　族一門の者が集結する。また、この洲本炬口サミットともいうべき場には、一族一

　　　門の武将だけでなく、千宗易、有持道慶、小笠原成助、大西出雲守、海部友光らは

　　　長慶の姉妹である自分の妻を帯同していた。

　　　河内攻めを控えた長慶自身が、姉妹の嫁ぎ先である一族の武将らに協力を求めると

　　　ともに、姉妹らと久闊を叙し、親しく懇談することを望んだのである。

　　　さらに、この会合に、千宗易が会合衆代表として堺から参加し、武器弾薬などの兵

　　　站活動に対する支援を申し込んだ。

　　　なお、この場に、根来の来襲に備える岸和田城の十河一存、かつて長慶に叛旗を翻

　　　した、いわくつきの芥川孫十郎は参加していない。

ナレーション「河内平定を志す三好長慶の呼びかけに応じ、淡路洲本の炬ノ口城に、城主

　の安宅冬康、阿波の三好義賢をはじめ、多くの一族一門衆が集結した。三好長慶の妹を

　娶っていた千宗易こと、後の利休もその一人であった」

　　　◎各人の名前テロップ

長慶「各々方、淡路まで遠路ご足労でござった。また、わが義弟の有持道慶どの、一宮長

　門守どの、大西出雲守どの、海部左近将監どのらは、ここ炬ノ口城までわが姉妹をお伴

　れいただき、感謝申し上げる。久しぶりに姉妹皆々の元気な姿を見て、この長慶、うれ

　しゅうござる」

ナレーション「そのとき末席から、千宗易の妻、妙が声を上げた」

妙「千家の家内こと、長女の妙にございます。久方ぶりに御兄上さまとお目もじ叶い、こ

　んなにうれしいことはございませぬ。次女の翠、三女の沃、四女の小牧野、五女の千歳

　もこれこのとおり各地から参じ、控えてございます。姉妹皆々をを代表して、ひと言ご

　挨拶申し上げさせていただきまする」

　　　姉妹一同、長慶に低頭し、「御兄上様、お久しぶりにございます」と、口を揃えて挨

　　　拶の口上を述べる。

　　　長慶、全員を見渡して、にこやかな表情を浮かべる。

長慶「おおっ、妙、翠、沃、小牧野、千歳、息災であったか。後で積もる話をしようぞ」

妙「ありがとうございまする」

　　　妙につづき、翠、沃、小牧野、千歳の姉妹一同、「ありがとうございまする」と、声

　　　を揃え、一斉に頭を下げる。

長慶「さて、此度、この炬ノ口城にご参集いただいたのは、ほかでもござらぬ。河内平定

　につき、ご一同と十分に協議し、策を講じたいと考えた次第。ご存念、腹蔵なく述べら

　れよ」

義賢「では、兄者。それがしから言わせていただくが、構わぬか」

長慶「うむ、構わぬ。申せ」

義賢「此度の畠山どのの裏切り、目に余る。いったい誰のおかげで、河内守護に復帰でき、

　逃亡先の紀伊から河内の高屋城に戻れたというのか。われら三好の者は、謀叛者の安見

　直政を追い払うため、血と汗を流した。その恩義も忘れ、根来と手を結んでおる直政め

　を守護代にするとは、信じられぬわ。もはや我慢できぬ。忘恩の徒である高政、そして

　卑劣な直政を討ち取るべし」

　　　ここで、長慶の義弟・千宗易が声を発する。

宗易「もし、河内の畠山家が三好家に矛を向ければ、まず和泉の岸和田城が攻められるの

　は必定。さすれば、戦火はすぐそばの堺にまで飛び火するやもしれませぬ。危険の芽は

　摘んでおくに越したことはございませぬ。堺の会合衆も力を合わせて、武器弾薬などの

　兵站をお支えさせていただきましょう」

　　　長慶、これにうなずき、その場の全員を見渡す。

長慶「ご一同、異議はござらぬか」

　　　有持道慶、小笠原成助、大西覚養、海部友光ら一族一門の者が「おうっ！」と異口

　　　同音に賛意を発する。

長慶「それでは、今日はこの辺で武張った話は止めにして、無礼講といたそう。酒の用意

　をいたせ。皆々と大いに飲み、歓談したいものじゃ」

ナレーション「これより一カ月後の五月一日、三好長慶はようやく芥川山城に帰城した。

　河内攻めについて、阿波・淡路の諸将と綿密な打ち合わせを行ったのである。六月に入

　り、阿波・淡路・讃岐の兵を率いた弟の三好義賢が尼崎に進出するや、長慶も芥川山城

　から出陣し、義賢軍と合流。全軍を河内へと進めた」

○河内・高屋城攻めの三好軍本陣

　　　◎テロップ

　　　永禄三年（一五六〇）七月

　　　河内高屋城攻め

　　　上座の床几に三好長慶、その左右に三好義賢、安宅冬康、十河一存らの兄弟をはじ

　　　め、松永久秀・長頼兄弟、三好長逸、三好康長ら重臣が居並ぶ。

　　　また、有持道慶、小笠原成助、大西覚養、海部友光ら義理の兄弟衆の顔も見える。

ナレーション「永禄三年七月、三好軍は畠山高政の籠る高屋城を攻めた。しかしながら、

　高屋城は逆茂木、乱杭、木柵などで針鼠のように防備を固めていた。某日、長慶を中心

　に軍議が開かれた」

長慶「高屋城の守備は針鼠のごとく堅固じゃ。力攻めにすれば、飯盛山城の安見直政が背

　後から襲って来るであろう。いかにすべきか」

義賢「では、高屋城に総攻撃をかけると見せかけて、飯盛山城の直政をおびき出し、それ

　を叩くという手ははどうじゃ」

長慶「ふむ。おとり策戦か」

義賢「さすれば、主君の畠山高政あやうしと見て、直政が飯盛山から援軍を繰り出してく

　るであろう。そこを伏兵で叩く」

長慶「よかろう。三日後、わが本軍は高屋城を攻めるゆえ、義賢の軍は伏兵として、飯盛

　山城から直政が出てきたところを、弓、鉄砲で迎え撃つべし」

義賢「おうっ！」

ナレーション「ついに合戦の火蓋が切られようとしていた」

○飯盛山城全景

　　　◎テロップ

　　　飯盛山城

　　　安見直政の居城、飯盛山城の井楼櫓に直政主従が眼下に目を凝らす。

　　　そこへ、物見の兵が注進に及ぶ。

物見「大変にございます。高屋城、三好軍より総攻撃を受けておりまする」

直政「なにッ。それは一大事。馬ひけいッ」

　　　安見直政、援軍を率いて飯盛山城を馳せ下る。

　　　騎馬の直政を先頭に、高屋城をめざす直政軍の旗指物が揺れる。

　　　それを迎え撃つべく、待ち構える三好義賢の軍。

義賢「弓隊、鉄砲隊、構えいッ！」

　　　喊声をあげて、馬蹄の音を響かせて迫る安見直政軍。

義賢「まだじゃ。まだまだ敵を引き寄せよ」

　　　さらに迫り来る安見直政軍。

義賢「放てえええーッ」

　　　鉄砲の一斉射撃の轟音。夥しい弓矢が、黒々と空を覆って敵を迎撃。

　　　馬のけたたましい嘶き声。

直政「ひけッ、ひけいッ。待ち伏せじゃ」

　　　あわてて引き返す直政。

義賢「追えッ。直政の首を獲れ」

　　　義賢軍の雄叫び。

ナレーション「かくして初戦は、三好軍の勝利に終わった。その後も畠山方は敗北を重ね、

　ついに高屋城、飯盛山城に立て籠もり、戦況は膠着した。やむなく長慶は両城を取り囲

　み、兵糧攻めを実施した。これに音をあげた畠山高政、安見直政主従は長慶に城を明け

　渡し、堺へと落ち延びていった」

○飯盛山城・井楼櫓

　　　　◎テロップ

　　　永禄三年（一五六〇）十一月

　　　飯盛山城

　　　冬晴れの日。

　　　陥落せしめた飯盛山城の井楼櫓に立つ三好長慶、三好義賢兄弟。

義賢「見よ、兄者。北に京の比叡山、西に摂津の地、さらに難波の海まで一望じゃ」

　　　長慶、南西に見える海の方角を指差す。

長慶「うむ。あれに霞むは淡路か。素晴らしい眺めよ」

義賢「京の都も、今の芥川山城よりここからが近い。水陸の交通の要衝でもある。いっそ

　居城を芥川山城から、この飯盛山城に移してはどうか。ここを大規模に改修し、われら

　の威光を見せつける天下城にするのじゃ」

　　　長慶、うなずいて応える。

長慶「それは、よき案なれど、芥川山城はどうする？」

義賢「せがれどのに、与えてはいかが」

長慶「ふむ。嫡男の義興にか」

義賢「左様」

長慶「ならば、そなたには河内の高屋城を与えよう。此度の河内攻めで、最も働き、手柄

　を立てたのはそなたゆえな」

義賢「しかし、それでは、阿波の勝瑞城に主がいなくなる。国の差配はいかがする？」

長慶「阿波の勝瑞城には、筆頭家老の右京進長房がおるではないか、あの者は切れ者よ。

　人望もある。阿波、讃岐の仕置きを任せても大事なかろう」

義賢「篠原長房か。あの者、治世、軍略いずれも常人はずれの異能あり。あの右京進長房

　なら、国の舵取りは確かであろう。兄者の申すとおりにし、それがしは河内の国を治め

　るといたそう。畿内で兄弟の力を合わせることが、必ずや理世安民、天下静謐への道と

　なるに相違ない。そうではないか」

長慶「うむ。皆の力で、この乱世を鎮めねばならぬ」

ナレーション「この年、永禄三年十一月十四日、三好長慶は飯盛山城を新しい居城と定め、

　三好政権を樹立した。この頃、松永久秀は大和を制圧し、信貴山城を築いた。織田信長

　に先駆けること二十年。飯盛山城は五畿内に覇を唱えた天下人・三好長慶の天下城とな

　ったのである。石垣造りの巨城が、長慶の威光を世人に見せつけ、五畿内、すなわち天

　下を睥睨した」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一日放映分（40分）終わり